

2023年9月2日

筆記 岡部

夏の自主勉強会 山口西田読書会（2023年8月19日）の Protokol

【テキスト】

旧全集の第四巻、西田幾多郎「場所」四第2段落252頁の13行目「非合理的なるものを内に包む意志の立場から云えば」から、253頁12行目「知覚の水平線を越えては物質というものはない」まで。

【概要】

「空間に於ける物」に関する記述が続いている。メモを頼りに西田旧宅の3人とリモートの1人の計4人で突破を試みたが、「三」の理解の曖昧さに足を引っ張られることが多かった。

【論点になったところ】

・判断や意志と同一の意義（252頁10行目）

この文の意味するところが問題になったが、それまで述べてきた判断や意志と同じように「空間も」という意味で特別な意味はないということで、さらっと過ぎた（が、それでよかったのか？）。

・感覚の背後（同12行目）

感覚から離れた物理的な空間ではなく、感覚の基底となるような超越的な基体を意味しているとの理解が示されたが特に反論はなかった。

・単に場所と考へられた空間（同13行目）

ここでは幾何学的空間とイコールでよいのではないかとの理解で一致した。

・非合理的なるものを内に包む意志（同13-14行）

「三」の247頁あたりの「意志」を手がかりに読むことができるか……と考えたが、247頁の方が難解だった。「力の世界」も「意志」も構成的範疇の側にあることは確認できた。

・力の概念は意志の対象化によって生ずる（同14-15行）

ここがこの日もっとも難解な力所で誰もはっきり説明できなかった。「働く」ことを言っているのか。課題ということで次に進む。「ここは物と力との関係を述べている。判断や思惟では力は生じない」との発言があった。

以上